優秀賞　〈高学年の部〉

最強軍団への感謝

千葉県　柏市立柏第六小学校　六年
小柏　蒼太

母と、二学年違いの妹、そしてさらにその五つ下の妹。僕は普段、この女系家族の中に、ぽつんと男一人で暮らしている。父はひたすら仕事に忙しく、日々の残業や出張が当たり前だし、ひところは単身赴任をしていたこともあって、残念ながら家族との関わりが薄い。そんな父親不在を穴埋めするように、母が本来の役割と父親の代役との両方を担い、毎日この家のかじ取りをしている。

そのせいで、時に爆発する母の怒りのエネルギーは、段々増大しているように思う。そこに加えて、二人の妹達もどんどん強大化している。上の妹は、まるで小さな母親気取りで、何かとがみがみやかましく、僕に文句ばかりぶつけてくる。そのくせに、自分はシャンプーの匂いをぷんぷん振りまいて、かと思えば頭をぽりぽりかきながら、あぐらをかいて新聞を読んでいたり。まるで、おばさんか、おじさんみたいな振る舞いだ。もう一人、末の妹の方は、僕が七才も年上であることなど一切お構いなしに、自分と対等の相手だとみなして、けんかを仕掛けてくる。僕に対してはひどく口が悪く、「バカー!!」を連発する。まさしく、テレビ番組に登場する、悪態をつくカラスのようだ。

こんな女子軍団に囲まれて、いつも僕は怒られてばかりいる。毎日あれこれ叱られて、ちょっとした悲劇の主人公みたいに、自分が思えてくることがある。が、しかし、僕はこの家族を嫌いにはなれない。むしろ、どんなに駄目を出され続けても、僕が最も心安らげる場所は、間違いなくこの家だから。誰よりも僕を理解して、認めて、守ってくれているのは、まぎれもなく、この最強トリオだからだ。

僕は、最高学年になっても、品行方正のかけらもない。夢中になると、つい自分本位の喋りが止まらなくなる。それに貧乏ゆすりのくせはいっこうに抜けず、テーブルの下ではいつも足をゆらし続けている。そんなうっとうしい僕に、年がら年中カタカタと響いてくる振動をやりすごしながら、根気よくじっくり耳を傾けてくれる存在は、他にそうはいない。口うるさい三人からの言葉の数々は、どれもただの文句や不満ではなくて、僕をよく知った上で、僕が暴走やへまをしないよう導いてくれるものなのだ、と冷静に見返せば気付く。本当にありがたいな、と思う。

これまで、習い事や大会等、僕一人の予定のために、母にはかなり飛び回ってもらった。妹達には、ずいぶん我慢や協力をしてもらった。辛く苦しかった時には、大きな支えになってもらった。皆のおかげで、僕の「今」がある。実は、心の中でずっと感謝していてもはずかしくて直球ではとても伝えられない。でも、僕の中にあるこの気持ちが、三人の胸にちゃんと響いてくれるといい。僕からの「ありがとう」が、どうか三人の心に届きますように。